

---

# 俺が秀吉でお兄様！？

あしゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺が秀吉でお兄様！？

### 【Nコード】

N6373W

### 【作者名】

あしゆき

### 【あらすじ】

もし、秀吉がバカテスではなく別の作品の世界に送られていたら・  
・そんなif物語  
『さてと愛しい妹達に会いに行くとしますかね』  
シスコンの秀吉がとある世界で旋風を巻き起こす！  
『俺が秀吉でお兄様！？』 始まります

ある意味「プロローグ」 (前書き)

初めましての方は初めまして。またお前かの方はそうだよ、俺だよ！

どうも、あしゆきと申します。バカテスの方も書いていたんですが

『番外編を連載してみたら？』と感想を貰ったので書き始めました

まだまだ未熟者ですがこれからよろしくお願いします

## ある意味「プロローグ」

突然だが、俺は死んだ。んでもって転生した、さらに能力も貰った

そんな俺だが今思えばバカみたいな死にかたしたなと思っている

まあ死の方についてはもう一つの方を見てくれや

そして俺が生まれて早十年。なに？キングダムゾン？仕方ねえだろ、作者に力量が圧倒的に足りないんだからよ

そんな俺だが、俺には二人の妹がいる。最近俺の後ろをちよこちよこついてきて可愛いいったらありやしねえ！

・・・すまない、取り乱した。さてと愛しい妹達に会いに行くところですかね

あ、自己紹介が遅れたな。俺の名前は『平沢秀吉』平沢唯と憂の兄だ！！

・・・けど、俺唯より三つ年上なんだよな

どうやって原作介入しよう・・・

「オーイ！秀吉！遊ぼうぜー！」

む、どうやら俺の幼馴染みが呼んでいるようだ

まあ友達付き合いは大事だし、めんどくせえけど行くと思いますか！

「分かった！今いく！つてか鬼ごっこしようぜー！」

さてと、今日も楽しく生きていくとしますかね

ある意味「プロローグ」 (後書き)

さてと、始まりました『俺が秀吉でお兄様!?!』

実は全くといっていいほど構想がありません!

なのでその場のノリと勢いで書いていきます!

感想お待ちしております!

それではまた次回!!

「慌ただしし限りだ」それが第1話（前書き）

今回はパパ聞き視点です

そのためけいおんキャラが出てきません

それでは今回もキバって行くぜ！

## 「慌ただしい限りだ」それが第1話

朝、爽やかな朝日で俺は目を覚ました。どうも秀吉だ。俺が転生して早十年、あれ？これ前も言った？まあいいか、とにかく俺ももういい大人だ。そのくせ恋人の一人も出来ていない。ちくせう

とりあえず俺は頭をフル回転させて今日の授業と授業後の予定を思い出す

・・・今日は確か二限目からだったな。そのあとは菜香さんと買い物だった気がする

俺は机に置いてある可愛らしい時計をみる。これは家を出て一人暮らしをする前に妹から貰った物だ、因みに、絵柄はミッ○ーだ。カチ、カチ、と音鳴らす時計に映されている時刻を見る

7時ちょうどか・・・早く行ってトイレを済ませないと先に使われてしまうな

俺は布団から身をお越し、クローゼットから私服を取り今着ている服と着替える。もちろん、着ていた服はちゃんとたたんで置いておく。そのあと、鞆に今日必要な教材を詰め、部屋をでる。そして階段を降りながら今日の朝食のメニューを考える

ジャー、ガチャン

ふう、スッキリした。さて、顔も洗ったし、そろそろ朝食を作ると  
しますか

俺は朝食の材料とエプロンを出して調理を始めた

裕太 s i d e

ジュー、カチャカチャ

そんな音と朝食のいい臭いに誘われ、俺の意識は浮かび上がった。  
時計を見ると時刻は7時半、なるほど確かに朝食を作るにはもって  
こいの時間だ

俺は寝ぼけた頭でとりあえず用をたそうと考え部屋を出て、トイレに入ろうとすると

「トイレはダメー！」

そんな甲高い、女の子らしい声が俺に向かって放たれる。別にトイレの中に入っていたとか、そんじゃなくてただ入ろうとしたら叫ばれた、それだけだ。声が出た方を見ると、金髪のツインテール、そしてまるでモデルのような顔つき。そう、俺に向かって叫んだのは小学生の小鳥遊美羽ちゃんだ

「言ったでしょ。女子が入った後は一時間以上経ってからじゃないとトイレに入っちゃダメって。デリカシーを持ってください！」

「でも美羽ちゃん、俺今すぐしたいんだけど」

「我慢してください！秀吉さんだっちゃんを守ってるんですから！」

そんなご無体な、待ってたら講義に遅れてしまいますよ。ってか秀吉は別格だろう。平日休日関係なくキッチリ朝7時に起きれるとか、どんだけ真面目なんだよ

仕方ないため俺は部屋に戻り着替えと用意をすませリビングに戻った。そこには美味しそうな朝食がテーブルの上に広がっていた

「ハイハイお兄ちゃん。ぼうつとしてないでさっさと椅子に座って」

後ろを見ると、我が家の支配者と言ってもいいセミロングの美少女

「小鳥遊空」ちゃん（中学二年）が両手にコップを持って立っていた

「あ、うん。ごめん」

俺は一言言ったあと大人しく席に座った。その隣の席には我が家の癒し、ひなちゃん（保育園児）が行儀よく座っている

「おいたんおはよう！」

と言った後に何故かケラケラと笑い始める。やはり三才児だからかとにかく笑いの沸点が低い

「お、来たか裕太。おはよう。もう少し待っていてくれよ」

とエプロンを着けて性別関係なく惚れてしまいそんな笑顔で俺に言

うのは俺の幼馴染み「平沢秀吉」だ。秀吉とはかなり長い付き合いとなる、幼稚園も一緒、小学校も一緒、中学も一緒だったし、高校も一緒、更には大学まで一緒ときた

まあそんな俺たちだからお互いのことで知らないことはない。何せ十何年間も一緒だったからな

元々この家は俺の家じゃない。そう、ここは秀吉の家なんだ。何で俺がここに住ませてもらってるのか？それには色々理由があるがまあ長くなるからここでは説明しない

と。俺がそんなことを考えている間に朝食の準備がすんだようだ。俺は目の前にあった箸を取りいつでも食べれるようにしておく

「よし、全員揃ったな。それじゃいただきます！」

『いただきます！』

その言葉を皮切りに乙女の戦いが始まる！

「はい、秀吉さん。あーん」

おーっと！先攻は美羽ちゃんだあ！しかも大胆にあーんとまでできた！秀吉はこれをどうするのか！？

「いや美羽ちゃん、俺一人で食べれるからさ」

なんとおー！秀吉美羽ちゃんのアーンを断った！

「ひ、秀吉さん！あ、あーん！」

おおっとお！次の空ちゃんも負けてはいない！顔を真っ赤にさせて秀吉にスプーンを差し出している！

「いやだからね、俺一人で食べれるから」

なんとなんと！秀吉はこれさえも断ったあ！

「ううー、べたべたやー！」

おおっとお？ここでまさかのひなちゃん参戦だあ！

「あ、ちょー！ひなちゃん！そんなに暴れたら・・・！」

ガンッ

バシヤッ！

.....

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！『隣のひなちゃんが暴れたと思ったらいつの間にか真っ白のびちよびちよになっていた』なにを言ってるのk(ry

「うわー！裕太に牛乳がッ！」

「やばっ！とにかく回りを拭かなきゃ！お姉ちゃん！」

「分かったわ！お兄ちゃん！座ってないでお風呂行ってきて！」

「.....うん。そうするよ」

「おいたんまっしろしろー！」ケラケラ

とこんな感じで我が家は今日も平和である

・・・余談だが、あんな風に解説をするのが俺の毎朝の楽しみだったりする

「慌ただしい限りだ」それが第1話（後書き）

はい！終わりました！第一話！

次はけいおんキャラを出そうと思います！

それではまた次回！！

「それは少し前の事」時かけ第2話（前書き）

久しぶりの更新です。

今回は過去編です、裕太の影が薄い・・・

頑張つて！めげるなよ裕太！

それでは今回もキバって行くぜ！

## 「それは少し前の事」時かけ第2話

空 side

あの人と会ったのは私がまだ幼いころ、裕理さんとパパ、そして妹の美羽と一緒に裕理さんの弟さんに会いに行った時だった。お互いに自己紹介を済ませ妹をトイレに連れていった、そこには裕理さんの弟さん、お兄ちゃんに会った。

その時の美羽は人見知りで耐えられなくなったのかその場を走って逃げてしまったのだ。追いかけてよとした時足を纏れてしまい転けてしまった。それを見たお兄ちゃんは心配したのか私の手を見て「うわっ、痛そ・・・」と呟いた、それを耐えきれなくなった私はついに泣いてしまったのだ

そんな時

「裕太アアアアツ!!」

あの人に出会った

その髪はしなやかで走る度に照明の光が反射してキラキラ光っていた。体も全国の女性が羨むほどに細いけれど痩せてはいない、まる

で絵本の女神様ようだと私は思った。走るフォームも完璧で本気で女神様じゃないの？と思うぐらいに

「女の子は泣かすなとあれほど言ったただろうがアアアアアッ！」

・・・ただし顔は鬼の形相だった

それを見た私は大泣きしてしまい、それを聞いたパパと裕理さんが飛び込んで来た。そのあとは覚えてない、気がつけば美人な女の人とお兄ちゃんが裕理さんに説教されていた・・・何故か美人の人の説教は怒る、というより注意する感じだったが、お兄ちゃんは本気で怒られていた

それから数分、裕理さんの説教が終わったすぐに美人の人は私と隣にいた美羽に近づいてきた

「さつきはごめんな？俺は平沢秀吉、お名前は？」

と開口一番にそう言った。私達は少しビクビクしながら口を開いたら

「そ、空」「・・・みつ」

「ん、空ちゃんにみうちゃんだな、よろしくな」

美人の人は綺麗な笑顔でそう言った

これがあの人との出会い、私の初恋の瞬間

ここでいきなり話は飛んで裕理さんとパパの葬式の日、親無しになってしまった私達は保護者、つまりお金がないと生きていけなくなつた

簡単に言うと、私達は親戚の人達に引き取られることになる。けれど親戚の人達は皆口を揃えて

「姉妹全員は引き取れない」

と言う、私はまた家族と引き裂かれるのか、そんなのは嫌だ！私達は親戚の人達に

「三人一緒にいたい」

と訴え続ける、しかし何度言っても親戚の人達は首を縦に振るうとはしなかった

いよいよそれぞれの人達に引き取れようとしたその時、勢いよく閉じられていた扉は開かれた

バアンツ！！

そこには私の初恋の人、秀吉さんが喪服を着た姿でそこにいた

「ハア・・・ハア・・・ま、間に合ったか」

秀吉さんは息を切らせながら私達の前に歩いてくる

「久しぶり、覚えてるかな？秀吉だけど・・・」

美羽は首を傾げていたが私ははっきりと覚えていたから少し頷いた

「そっか。まあ美羽ちゃんは幼かったし、仕方ないかな」

「おい、なんなんだ君は。ここは親族以外立ち入り禁止だぞ」

と親戚の人が高圧的に秀吉さんに問いかける、しかし秀吉さんは気にした様子もなく普通の態度で答えた

「始めまして、俺は瀬川裕太、裕理さんの幼馴染みの平沢秀吉だ。今日は用があつてここに来た」

こんな時に用事？私達姉妹もふくめてその場にいた全員が頭に疑問符をつけた

「今、この子達の保護者を決めてるんだろ？なら俺がなつてやる」

は？この時全員の心境は完全に一致した。へ？なるって、保護者に？秀吉さんが？

「俺がこの子達を全員纏めて面倒見てやる」

「ふざけるな！そんな自分勝手なこと許されると思っているのか！

？大体、お金はどうするのかね！住居は！？それに見たところ君は学生だろう！？この子達の安全が保証できるのか！？」

まるで乱れ打ちのような言葉の暴言、だが秀吉さんは臆することなく逆に質問した

「じゃあテメエらはどうなんだよ？保証出来んのかよ？その安全って奴をよ」

その質問に誰もが口を閉ざす。そう、出来ないのだ。必ず大丈夫という、絶対の保証が

「・・・だったら俺が引き取る、

俺が三人纏めて面倒見てやる。

金は俺が稼いでやる、

住居も用意してやる、

帰る場所なら俺がなってやる。

この子達が巣立ちするまで俺が

この子達を守る、立派なパパになってやる！」

そこから先は物事がまるで予想されてたかのようにトントン拍子に進む。こうして私達は書類上、秀吉さんの子となった

そして現在にいたる。秀吉さんは大学に通いながら働いている。なんでも高校の教師をしているらしい、免許も無いのに大丈夫なの？と聞いたことがあるのだけど、いや、まあ、なんかいけたと言われた

……いや、普通はいけないと思う。一体どんなコネを使ったんだろっ？

「ほいほいほい」と

「ちよっ！美羽ちゃん！それ反則でしょ！」

「いえいえ、これも一つの戦略ですよっ」と

「うがアアアアッ！！俺のカー〇イーがアッ！！！」

こんな日々を見てると本当に秀吉さんには感謝してもしたりない。私達三人を養って、その上お小遣いもプレゼントもくれる。本当にこの人が私達のパパでよかった

・・・けど、一つだけ問題があるのよね。それは

書類上秀吉さんの子だから結婚が出来ないということ、はっきり言  
ってこれはかなりまずい

ここらへんではっきりさせておこう。私は秀吉さんのことが大好き  
だ、愛していると言っても過言ではない。それは家族としても異性  
としても

しかし、秀吉さんを狙う者は多い。私の知り合いでも二人はいる、  
秀吉さんのことだからもしかしたらもつといるかもしれない

だったら美羽が友達の家泊まりに行く今日がチャンスだろう、な  
んとかして今日で秀吉さんを手に入れたい

・・・あれ？けど事実婚はいけるんだっけ？だったら既成事実さえ作ってしまえばこっちのもの？

やばい、私天才かもしれない！！そうと決まれば早速行動開始ね！  
！やるのは夜として、どうやって迫ろうか・・・そしてそのあとは  
・・・えへへへ・・・／／／／／

平沢家は今日も平和でした

ps、その日の深夜、若い男性の叫び声が響いたとか響いてないとか

「それは少し前の事」時かけ第2話（後書き）

やべえ・・・何も書くことがねえ・・・

・・・無難に終わらせとくか

感想お待ちしております。それではまた次回！

「だからあれほど言っただろう・・・」**追試騒動第3話**（前書き）

皆様お久しぶりです！

まだスランプから脱出出来そうにありません

もうしばらくお待ちください

それでは今回もキバって行くぜ！

「だからあれほど言っただろう・・・」**追試騒動第3話**

「暇だなあ」「暇だな」「暇ですねえ」「暇ねえ」「ひーまー」

この子達が来て早数週間、俺達はものすごく暇だった

今日は珍しく全員揃ってリビングでダラケ中。飯も食ったし、どうしようか・・・

「」「」「・・・ハア」「」「」

暇だなあ・・・

とそこに一本の電話がかかる

プルルル！プルルル！プルルル！

「・・・俺いくわ」

「」「」「くっくっくっくっ」

・・・これは想像以上にダラケてるな。俺はリビングを出て、廊下にある電話の受話器をとった

ガチャッ

「もしもし、平沢ですけど」

『あ、お兄ちゃん？憂だけど・・・』

「おー、憂か。久しぶり、元気にしてるか？」

電話をかけてきたのは俺の妹の一人、「平沢憂」だった。憂は簡単に言うと俺に次ぐ完璧超人だ、頭脳明晰、容姿端麗、おまけに料理は極上ときたもんだ。誰もが喉から手がでる程欲しい妹である（実際、裕太にも憂ちゃんくれ！っと言われた）

『うん、久しぶりだねお兄ちゃん。私は元気だよ、けどたまには家にも帰ってきてね。最近お兄ちゃんの服じゃ耐えれなくなってきたから』

「あれ！？寂しいからじゃないの！？しかも服が一つ足りないと思ったらお前の仕業か！俺の服なんかとって、一体何に使っつもりな

んだ!？」

『何につて・・・ナニにだけど?』

「はいアウトオオオオツ!!何やっちゃってんの!?!お前正気がツ!?!」

『私はいつだつて正気で本気だよお兄ちゃん!さあ、押さえきれない私の初めてを受け止めて!』

「重オオオイツ!!重すぎて受け止められる自信がねえよ!そもそもそんな物受け取れるかアアアアツ!!」

ゼエ、ゼエ、ゼエ・・・つたく、なんでこんな子に育ったんだ?俺はどこで教育を間違えた・・・

『で、お兄ちゃん。そろそろ本題に入るけど、大丈夫?』

「黙れ、張本人。つて今のが本題じゃなかったのか?」

『まああれもなんだけど。それより大変なの!』

あれもなのかよ！？まあいいけど

「おk、落ち着くんだ。で？誰が、どう大変だった？」

『う、うん。実は』

「はあ！？唯がテストで赤点とった！？俺があれだけ言ったのにも関わらず！？」

『う、うん』

憂の話をまとめると、唯はどうやら向こうの学校で上手くいっているらしい、しかも、なんとあの唯が軽音部に入って頑張ってるらしい、この前もギターを買ってどうやら本格的にやってみていた。うん、そこまではいい。だが一年初めてのテストに落ちて追試を受けることになったらしい、さらに、それに落ちると部活動を強制的にやめさせられるらしい

憂としては唯が初めてやる気を出して取り組んだことを止めさせたくない、だから俺に追試勉強を頼みたい、だそうだ

『あの・・・駄目、かな？』

「ハア、俺も唯が真剣に取り組んでいる物を止めさせたくはない」

『じゃあ!』

「ああ。受けてやるよ。何より大切な妹の頼み事だからな」

『ありがとうお兄ちゃん!お礼に私の初めてを「いらないからな!」  
ちっ』

舌打ちすんな

「それで、いつ行けばいいんだ?」

『今日』

「……は?悪い、もう一回言ってくれないか?」

『だから、今日だよ』

「はあ！？おまつ、今日って！・・・まあ暇だからいいけど」

『じゃあさっきのオーバーリアクションはなに？』

「とりあえず、そっちで一泊するけどいいよな？答えは聞いてない」

『あれ？スルー？ハッ！これはまさか新しいプ』ガチャッ！ツ  
ー、ツー、ツー

ふう、危なかった。もう少しで言わせるところだった。そんじゃ荷物の用意・・・はいいか、向こうにも着替えぐらいあるだろうし

「裕太、ちょっと向こうで泊まってくるわ！」

「は？お前急になにを」

「飯は仁村に頼んでおくから！皆の世話をよろしく頼む！それじゃ！行ってきます！」

裕太が何かを言おうとしていたがそれを俺は切って返事も聞かずに家を飛び出した

で、到着したのが平沢家。俺の実家でもある

「ただいま」

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

「・・・なあ、憂」

「何？お兄ちゃん？」

「何でお前はバニースーツなんだ？ってかそんな物どこから持ってきた！？」

「何言ってるのお兄ちゃん？今まで何度もこのかつこうでやってきたよ？忘れたの？」

「そんなことやったこともねえよ！ってかサラッと嘘つくんじゃないかね！・・・で？何でコスプレなんてしてんだ？」

「え？だってお兄ちゃんはコスプレ好きだって・・・裕太さんが」

「アイツかアアアアアツ！！とにかく着替える！話はそれからだ！！！」

「え？でも「着替える」・・・はい」

憂は残念そうに自分の部屋に帰った

それにしても・・・

「・・・可愛かったな・・・ハッ！？俺は何考えてんだアアアアアツ！！！」

数分後

「着替えてきたよ・・・」

「なんでそんな残念そうなんだよ・・・まあいいや。それで唯は？」

肝心の唯がないと勉強会もくそもないからな

「もうすぐ帰ってくると思うよ」ただいま〜！』『』『お邪魔します』『』ほらね、おかえり〜！」

そう言っただけは玄関に走っていった、ってか今声多くなかったか？お友達でも連れてきたのかねえ？そう思っていると複数の人が階段を登る音が聞こえてくる。それと同時に憂が帰ってくる

「お兄ちゃん、お姉ちゃんの部屋にこれ持って行ってくれない？私は洗濯物を干さないといけないから」

とお菓子や飲み物をお盆に乗せそれを差し出しながら言う憂、俺は勿論それを受け取り階段を上り、唯の部屋をノックした。すると中から『どうぞー』とのんきな声・・・もう少し緊張感のある声かと思っただけ、中々余裕そうだな

俺は一声かけてドアノブをひねった

「おーす、頑張ってるか唯？」

「あー！兄君！にーくーん！」

と我が妹「平沢唯」は人前だというのに俺に抱きつく

「おわっ！こら！離れる！」

「にー君！にーくーん！」

「だアアアアアッ！！とつとと離れるオオオオオッ！！！」

数分後

「いや、見苦しいところをみせたな」

「い、いえいえ」

やっと離れた唯を隣に俺は唯の友達に話しかけた。皆いい娘そうだよかった

「じゃあ自己紹介から。俺は平沢秀吉、お察しの通り唯と憂の兄だ。よろしくな」

やっぱり何事も最初は笑顔だろ。そう思った俺は今自分に出来る限りの笑顔を送った

すると

バキューンッ！

と何かが撃ち抜かれた音がした。それと同時に友達の色が赤くなる

？風邪かな？春だけど、気をつけるよ

ベース「（ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！優しい笑顔も性格も私の好みにジャストフィットオオオオオッ！！）」

ドラム「（うわ、綺麗な笑顔。本当に男の人なのかな？）」

キーボード」(あらあらあら、まあまあまあ)」

そんなことを考えていたなんて今の俺には当然分かるはずもなかった

ってか皆可愛いな。レベルが高すぎて居心地が悪い・・・

「っと、お喋りはここまでにして。唯、勉強しろ」

「うえーい」

うわ、なんてやる気のない声なんだ。仕方ない・・・

「久しぶりに料理でも作るかな」

「キタ (。。(。！！やる気MAX！！」

・・・まあ、やる気が出たならいいか

「それじゃあ、よろしくな」

「は、はい！任せてください！／＼／＼／＼」

黒のロングの娘は声を張り上げ俺に言った。うん、いい返事だ。これなら任せれるな

そう思った俺は久しぶりの自分の部屋で寝転がることにした

「だからあれほど言っただろう・・・」**追試騒動第3話**（後書き）

突然で申し訳ないですが、この作品ともう一つクロスさせる作品のアンケートを取りたいと思います

秀吉は教師になっている、と書きましたが

どの作品の教師になるのがいいですか？小、中、高は問いません

自分が秀吉と絡ませたい作品を選んでください

なお、出来るだけ作品は一つにしてください

例「らき すた・黒井ななこの幼馴染み」

アンケートご協力お願いします！

「皆様、ご協力ありがとうございました！」アンケート結果発表！

はいー！皆様、おはようございますこんにちはこんばんわ！作者のあしゆきです！

「どうも、秀吉だ」

『どうも、本編ではまだ出番すらない仁村です！』

皆様、あしゆきの我儘（と言つ名のアンケート）にお付きあい頂いてくださってありがとうございます！

「本当にな。感謝してもしたりない」

『まあまあそれは置いといて、どのくらい集まったのさ？』

置いといてって・・・ええっと、皆様のご協力により、なんと1票も集まりました！

「おお、中々集まったな」

ああ！これも一重に俺の力さ

『秀吉ちゃんの人気のおかげだね。よっ！流石秀吉ちゃん！』

「はいはい、わあったわあった。ん？駄作者、何へこんでんだ？」

別に・・・なんくるないさ・・・んん！それでは気になる順位の方を発表していきましょう！

「それじゃあ今回も出るぜ！」

『エブリバディ！』

「『カミング！アウト！』」

まずは第三位からの発表だ！

「それじゃあサクツと行くぜ？第三位！『ロウきゅーぶ』と『咲・Saki』そして『真剣で私に恋しなさい！』だ！」

『どれもこれもいい作品だけど、残念ながら及ばず。三個とも一票

入ってたぞ』

まだまだ行くぜ！第二位！

「おっしや！第二位は

『迷い猫オーバーラン！』

『T O L O V E R』

『らきすた』の三つだ！」

た 因みに、あしゆきはT O L O V E Rは本気でいいかもと思いまし

『続いて、は第一位！秀吉ちゃんよろしくう！』

「オーライ！任せろ！第一位は！



「まあなんて白々しさ！ボードも真つ青だよ！！」

『と言うわけで、アンケートを再び開催するよ！項目は以下の四つだ！』

『生徒会の一存』（椎名姉妹の幼馴染み）

『らきすた』（黒井ななこの幼馴染み）

『T O L O V E R』（リトの担任）

『真剣で私に恋しなさい！』（モモ先輩の担任）

！  
我儘な最低野郎ですいません！アンケートにご協力お願いします

「そのクズ野郎曰く、作品は上位二位までクロスするそうだ」

「『』投票、よろしく願いします！-！』」

「皆様、ご協力ありがとうございました！」アンケート結果発表！（後書き）

期限は同じく、来週の火曜までとさせていただきます

こんなクズ野郎ですが、出来れば見捨てずにアンケートにご協力お願いします！

それではまた次回！

ps、二作品同時投票する人が出てきたので忠告させていただきます  
出来れば投票するのは一作品にしてください。ご協力お願いします

「夢に煌めけ！明日にときめけ！」・・・暑苦しい第4話（前書き）

アンケートご協力ありがとうございました！たくさんの投票ありがとうございました

詳しい結果はあとがきで

クロスさせる作品は今回の話でちょっとだけ書いてるけど、分かる人いるかな？

それでは今回もキバって行くぜ！

「夢に煌めけ！明日にときめけ！」・・・暑苦しい第4話

さて、俺は今唯の部屋に行き唯の友達に挨拶をした後リビングで茶を飲んでるところだ

・・・はあ、落ち着くな

ピンポーン

ん？お客さんか？憂は洗濯物干してるし、俺が出るしかないか

ピンポーン

おっと、これ以上待たせたら悪いな。俺は椅子から立ち上がり玄関に向かい扉を開けた

ガチャ

「どなたさまですかって和ちゃん？」

「こんにちは、秀吉さん」

そう礼儀正しく挨拶をしたのは”真鍋和”ちゃん、うちの妹唯とは幼稚園からの付き合いだ、つまり俺とも長い付き合いってわけだ

「急にどうしたんだ？唯に用事か？」

「あ、はい。勉強してるって聞いたので差し入れを」

「ふーん、そうなのか。まあそういうことなら入れよ」

「はい（言えない、来た理由が秀吉さんの姿が見えたからだなんて絶対に言えない）」

「何か俺の顔についてるのか？ずっと俺の顔見てるけど・・・まあいいか」

俺は俺は和ちゃんを家に入れる。挨拶をしてから和ちゃんは靴をきちんと並べる。本当、何から何まで礼儀正しいな。唯にも見習ってほしいものだ・・・

『お帰りなさい、お兄様』

『お兄様、今日は私が料理を作ります』

・・・前言撤回、唯は今のままが丁度いい

「秀吉さん？どうかしましたか？」

と俺の顔をのぞきこむ和ちゃん、どうやらボーっとしてたようだ

「いや、何でもねえよ。それより、唯の所に行かなくていいのか？」

「あ、はい。そうですね、それでは失礼します」

そう言って和ちゃんは階段を登っていった

・・・さて、憂の手伝いでもするか

憂の手伝いも終わり、暇になった俺は久しぶりに自分の部屋でゆっくりしようと思つて部屋に向かっている。その途中、唯の部屋の前に誰かが正座して座っている。確かめるために近づくと

「……何やってるの？田井中さん」

それは唯の連れてきた友達、田井中律ちゃんだった

「へ？あつ！ひ、平沢さん！？いや、あの！これは……」

「……あー、もういいよ。なんか分かった気がするから」

多分、アイツと一緒にバカやって追い出されたんだろうな……ハア、全くアイツは成績はいいのにどうしてあんなに性格が……

「あの……？どうかしました？」

「あ、いや、何でもないさ。ちょっとボーっとしてただけ」

しかし、いつまでもここにいてもらつては困るな……そうだ

「なあ田井中さん。暇なら一緒にゲームでもしないか？」

「はえ？げ、ゲーム、ですか？」

呆然とした顔で田井中さんはそう言う、対して俺は少し不機嫌だった

「む、何だ、その意外そうな顔は？俺だって普通にゲームぐらいするぞ」

「あ、いえ。そういうことじゃなくて・・・」

？何で少し戸惑ってたんだ？って、ああ、そういうことか

「もしかして怒られるとも思ったのか？バカ言え、唯のたために来てくれた子を怒れるかよ」

そりゃあ確かに俺は教師だけどさ、こういう子は好きだからな。それに比べてあの戦闘狂は・・・もう少し見習ってほしいものだ。命がいくつあっても足らん

「とにかく、俺も暇だからさ、付き合ってくれると嬉しいんだけど。ダメか？」

「あ、いえいえ！そんなことないですよ！是非とも一緒に一緒させていただけましゅ！」

・・・囁んだな、きっと敬語を滅多に使わないんだろう

「プツ、ク、ククク・・・！ああ、それじゃあククツ！行こうか」

「あう、はい／／／／／」

田井中さんは顔を真っ赤にしながらついてきた

数時間後

「隙あり！」

「ちよっ！それはなしでしょ律ちゃん！」

「これも立派な戦術です！」

「ぐわアアアア！俺のカー〇イーがアアアア！」

あれから数時間後、俺は田井中さん、もとい律ちゃんとすっかり仲良くなっていた

今はゲームで対戦中、どうして俺の周りにはこんなにゲームが強い奴が多いのだろうか？あのファミリィしかり、あの廃人しかり・・・もしかして俺が弱いのか？

「認めない！認めてたまるものかア！律ちゃん！もう一回だ！」

「フッフ、何度でも受けますよ、秀吉さん！」

クソツ！いいぜ、テメエがそんなに俺に勝てる自信があるってんなら！まずは！その余裕ぶった顔をぶち殺す！

「な！？何やってるんだ律！」

「あ、遷」

いざ始めようとしたとき、いつのまにか後ろに秋山さんがいた

「ひ、秀吉さんとゲームだなんて！なんてうらやmじゃなかった、迷惑だらう！」

「ああ、いいよ。そもそも俺が誘ったんだし」

「け、けど……まあ秀吉さんがそう言うなら。律、もう帰るぞ」

「あれ？帰っちゃうのか？もう遅いし、送っていいところか？」

「い、いえいえ結構です！大丈夫ですから！ほら律、行くぞ！」

「あーれー」

秋山さんははや歩きで律ちゃんを引っ張って行った……中々面白い子だな

結局その日は皆帰り、俺は久しぶりの自宅で一日を過ごした

……何故かデジャブな気がしたが、気にしたら負けだ



「夢に煌めけ！明日にときめけ！」・・・暑苦しい第4話（後書き）

アンケート結果発表！

それではまずは合計数から！

アンケート、総票数26票

イヤッッホオオオオオオウ！思わず我が家の車を殴ってしまった  
ぜー！

・・・オヤジにぶん殴られたけど

そ、それでは次に参りましょう！と言いたいところですがめんどく  
さいのでこれで！

T O L O V E R 3票

生徒会の一存 12票

マジ恋 10票

らき すた 1票

らき すたエ・・・

というわけで、クロスさせる作品は『生徒会の一存』と『真剣で私  
に恋しなさい！』に決定！

皆様、自分なんかの我が儘のために沢山のご投票、ありがとうございます！  
いました！

これからもあしゆきと我が主人公、sをよろしくお願いします！

それではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6373w/>

---

俺が秀吉でお兄様！？

2011年10月25日01時01分発行